伊勢ノ海部屋界わい（中）

勝海舟生誕の地

伊勢ノ海部屋跡地のすぐ西隣は両国公園として、周辺住民の憩いや散歩の場となっているが、ここが実は歴史マニアの観光スポット。勝海舟の生誕の地だった。日本の歴史を動かした人の生まれた場所だけに、地元自治体（墨田区）も大事に顕彰している。

庄内には縁が深い「戊辰戦争」に関しても、公園内に大きな展示コーナーがあり、勝と西郷隆盛が江戸・田町の薩摩藩邸で会談し、江戸城の無血開城に導いたことなどが説明されている。

跡地から歩いて3分のところには忠臣蔵の敵役・吉良上野介の屋敷跡がある。ここに赤穂浪士が押し入ったわけだが、三河（愛知県）では名君として知られ、敵討ちされた12月14日は毎年「吉良忌」が執り行われている。また大相撲興行の発祥の地、境内で相撲興行が行われていた回向院もすぐ近くだが、この寺には鼠小僧次郎吉の墓があり、長年捕まらなかった運の強さに〝賭け事にご利益がある〟と、墓石を削って持っていくギャンブラーが多い。

公園内には勝の生誕記念碑が。揮ごうは隆盛の孫・西郷吉之助

昭和29（1954）年秋、終戦から間もなく10年の頃、敗戦の傷も少しずつ癒えて復興に向け、東京も活気づいていた。体験入門のため初めて訪れた東京。16歳の剛少年にはどう映ったのか。街中を都電が「チンチン」と音を鳴らして通ってもいた。

伊勢ノ海部屋にはまだ土俵がなく、程近かった双葉山の時津風部屋に通いの稽古。初めて見学した日、師匠からまわしを付けるよう言われ、土俵に降り立った。ほんの少し先輩の序二段あたりを相手に相撲を取ることになった。

稽古体験が始まった

師匠の兄弟子たちへの指示は「少し手を抜いて、花を持たせてやれ」。うまくいけば、剛本人の自信にもなるし、本来の目的でもある入門に傾くだろうとの思惑だ。

ただ村相撲だとしても、剛は経験による相撲勘を備えていた。居並んだ先輩たちに突っ張りに出て、組んでもひきつけての吊り寄りで、相手を土俵外に持っていった。「最初は手加減してくれたのが分かる。だが次の相撲は実力で勝てた気がした。オレ、結構やれるかもしれない」。これが正直な思いだった。

二者択一入門へ傾く

「山形に帰って、高校を卒業したら堅実な道を見いださなければならない。もし農業なら朝から夜まで、忙しいうえに力仕事だ。相撲は朝稽古はきついが、昼からはそんなにきついこともなさそうだ。今は親切な兄弟子たちも、じきに応対が変わるだろうが、自分さえ強くなれば、面倒くさいことも言われないかもしれない」。頭の中で、今後の自らの方向性が探られ始めた。故郷に戻るか？相撲をやってみるか？の二者択一。とにかく、今の自分の実力を知るため他の部屋の力士と相撲を取ってみたいという気持ちも膨らんだ。

展示コーナーは屋根がなくても装飾は頑丈。勝の写真も鮮明

3年預けてほしい

あくまで〝仮の道〟ではあったが、新弟子検査を受けることに本人の気持ちは傾いていった。

一緒に上京した父・元雄は妻かつゑから何度もクギを刺された言葉を反すうした。「上京することで、伊勢ノ海部屋にも世話人（田中誠一）にも義理を果たした。剛をちゃんと連れて帰ってくるんだよ」。これは基本守るつもりだった。それだけに「オレ相撲やってみる。自分を試したい」の息子の言葉にびっくりしたが、師匠が思いのほか紳士だったことには好感を抱いていた。「5年、いや3年でいい。息子さんを私に預けてくれませんか」。角界入門に事は進んでいった。

＝敬称略＝

（富樫　嘉美）

元同級生か1学年上の先輩か？撮影場所は東京で間違いないと思うが

○…柏戸と学生服姿3人の記念写真が出てきた。稽古まわしが幕下以下を示す黒まわし（実際はねずみ色）なので、十両昇進（32年九州）前となる。公園のベンチに座り、後方の建物の感じを考えると、両国公園と思われる。入門前、定時制で学んでいた鶴岡南高によると31年夏場所（5月）に幕下優勝した富樫（当時のしこ名）を修学旅行で激励した記録が残っているという。写真に心当たりのある人がいたら当時の様子など教えてもらえたらうれしいです。

毎週火曜日付に掲載